

常総市まち・ひと・しごと 創生総合戦略会議 会議録

と き 平成27年7月14日(火)
午後1時30分から

と ころ 常総市役所 1階 市民ホール

第2回 常総市まち・ひと・しごと創生総合戦略会議 会議録

平成27年7月14日（火）午後1時30分から、第2回常総市まち・ひと・しごと創生総合戦略会議を常総市役所1階市民ホールに招集する。

会 議 日 程

- 1 開 会
- 2 あいさつ
- 3 会議録署名委員の指名
- 4 ガイダンス
- 5 会 議
常総市ミッションについて
 - ①「常総市における安定した雇用を創出する」
 - ②「常総市への新しい人の流れをつくる」
 - ③「常総市で若い世代が結婚・出産・子育てをする希望をかなえる」
 - ④「時代に合った常総市をつくり、安全な暮らしを守るとともに、常総市と他の地域を連携する」
- 6 そ の 他
- 7 閉 会

出席委員 奥座 清 飯田ふじ子 喜見山 明 堀越 輝子 草間 正詔 生井 邦彦 長岡 徳樹
中川 邦夫 北島 重司 細野 真哉 岡田 一夫 五木田裕一 福田 真琴 小竹 里佐
秋場 ふぢ 北村 篤子 岡崎 宏 塩畑 実 倉持 創一

事務局 企画部長 加倉田 謙二 企画課長 長妻 克美 情報政策課長 平間 孝
CIO補佐官 岡崎 宏 企画課長補佐 小林 寛明 企画課特定政策係長 高野 慎吾
企画課特定政策係 宮川 直也 金子 浩也

企画課長補佐 ただいまから、第2回常総市まち・ひと・しごと創生総合戦略会議を開催する。それでは、会議設置条例第6条に基づき、戦略会議の会長である、塩畑副市長に議事進行をお願いします。

会 長 本日は、お忙しい中、第2回常総市まち・ひと・しごと創生総合戦略会議にお集まりいただき、感謝する。今回から、皆様よりさまざまな意見をいただき、議論していきたいと思う。なお、本会議については、公開が原則となっているので、会議録を作成することを申し添える。まず、会議録署名人を決めたい。会長が指名してよろしいか。

(異議なしの声)

会 長 「喜見山 明」委員と「堀越 輝子」委員を指名する。

ここで、会議に入る前に報告がある。今回から新たに筑波銀行様を戦略会議の委員に加える。条例には、委員は20名以内となっているので、情報統括補佐官である岡崎宏氏には事務局側から支えてもらうことにした。それでは、本日お越しいただいている筑波銀行水海道支店長の本橋美章様からご挨拶いただく。

本橋委員 本日から戦略会議に参加させていただくことになった。よろしくお願ひしたい。

会 長 それでは、次第に基づき会議を進めていきたい。次第4のガイダンス、5の協議は一括して進める。本日は、常総市まち・ひと・しごと創生総合戦略の策定を共同研究で進めている筑波大学の岡田幸彦准教授にお越しにただいでいる。ここからは岡田准教授にバトンを渡し、進めてもらう。

岡田准教授 はじめまして。筑波大学の岡田幸彦です。私の自己紹介は、お手元にあるサービスフロンティアジャパン経営者フォーラムの冊子をご覧くださいと思う。私は、約14年にわたり、我が国のサービス分野の生産性向上のために研究をし、経営者教育を行っている。

では、なぜ私が、常総市のまち・ひと・しごと創生総合戦略の策定という大役を担うことになったかと言うと、常総市と筑波大学は3年前に包括連携協定を結び、その一環として私は2年にわたり常総市の行政評価がうまく機能しているかの効果検証をしてきた。それ以外にも、いろいろな事業に関わらせてもらっている。そのようなご縁から、このたび戦略の策定もお手伝いさせていただくことになった。

さて「まち・ひと・しごと創生総合戦略」というキーワード、これは何かと言うと、将来、常総市はどうあるべきで、また、どうなっていたいのか、そのためにこれから何を重点的にやっていくべきなのかということである。この戦略を立てるという作業を一緒にやらせていただく。そして今日、この戦略会議のコーディネート役を務めさせていただきます。

それでは、資料に基づいて進めていく。まず、第1部のチュートリアルセッションでは、私たちが何を考えなければいけないのか、その問題意識の共有を復習する。その後、当戦略において絶対にはずしてはいけない、やらなければならないこと、ここではミッションと呼んでいる。常総市として絶対にやらなければならないことは少なくとも4つあると国が示している。その4つについて、戦略会議委員の皆様からご助言ご提案をいただきたくブレインストーミングの場を設けたいと思う。その際、お手持ちの補足資料は見ずに、肌感覚で常総市はこうあるべきだということを自由にご発言いただけたらと思う。

では、はじめに、チュートリアルセッションを行い、この場にいる皆様の問題意識を共有したい。

(資料に基づき説明)

岡田准教授 本番セッションに入る前に、休憩を10分間とる。
本番セッションでは、前述の4つのミッションごとの自由な発言、ブレインストーミングを行いたい。これにより、各ミッションごとのアイデア出しを行う予定である。

(休憩)

岡田准教授 それでは、本番セッションに入る。
まず、ミッション1「常総市における安定した雇用を創出する」についてアドバイスをいただきたい。
実は、本日の戦略会議の開催にあたり、何もお伝えしていなかったのだが、事前にミッション1～4への貴重なアイデアをくださった方がいる。北島委員、感謝申し上げる。最初にそれを北島委員に発表していただく。

北島委員 私は茨城放送の社長をやっている。30年以上新聞記者をやり、国内10か所、国外でアメリカ・ワシントンや南米にも住んでいた。常総市は出身地で愛着がある。今日は、私の思う常総市のあり方について、北島らしいアイデアを1～4をまとめて発表したいと思う。

私は、求められている地方創生とは「人口減少に歯止めをかけて、持続可能なまちづくり」であると考えている。そのために、常総市として何ができるかと考えたときに、3つの基本原理があると考えられる。

それは、①住みたくなるまち・常総 ②働けるまち・常総 ③訪れてみたいまち・常総 である。これらの中に、国が提唱する4つのミッションが全て含まれている。

まず、①住みたくなるまち・常総づくりについてであるが、これは、国の基本目標2と3に相当する。一般的に高齢化社会を嘆きがちであるが、むしろ高齢化社会を逆手に取り、高齢者をターゲットにしたまちづくりをしたらどうかと考えている。中心市街地の衰退が目立つ中で、若者世代であれば、車で郊外の大型ショッピングセンターに行けるが、70～90代ともなると、車に

乗ってショッピングセンターに行くことはできない。町の中で買い物せざるを得ないのだが、最近、まちなかの空き店舗やシャッター街を活用して、若者たちが小さな商店を経営するという動きがある。このような若者たちが高齢者に対する配達業務を行っている。また、高齢者専用レジを設けているスーパーマーケットもある。これにより、円滑な会計や、高齢者への丁寧な対応が可能となっている。店によってはカートへの荷物の出し入れを支援してくれるところもある。これらは、小さなことではあるものの、高齢者に優しい町であれば、あらゆる世代の人に対しても優しい町となると考えられる。つまり、高齢者が住みやすい町を作ることが、具体的な課題としてあげられるのではないか。例えば、車いすに対応するために道路の段差をなくすなど、高齢者の視点でまちづくりをするということである。

また、常総市には外国人、特にブラジル人が多いという特徴を生かし、これを財産として、外国人との交流や異業種交流会を開催することで、人材育成に貢献できるのではないかと思われる。また「住みたくなる」という観点から、若者の流れを呼び込むべく、IターンやUターンの政策が必要であろう。

次に、②働けるまち・常総であるが、これは基本目標1に相当する。常総市らしさという観点からすれば、常総市にある資源、財産を生かした仕事の創生となるだろう。農産物への付加価値、工業団地とのマッチングが身近な資源を利用した雇用創出になる。また、③とも関連してくるが「フードバレー常総」というものもある。アメリカのシリコンバレーを参考にして、町にある産業等の集積地を考えたときに、食と農が結びついた「フードバレー」を掲げられるのではないか。それを、空き家・空き店舗を活用して行えるのではないかと思う。

加えて、高齢者、障がい者、女性の働き場の創出も必要である。

最後に、③訪れてみたいまち・常総である。これは、基本目標4に相当する。これは、インバウンドの創出をターゲットにしたまちづくりが必要だということである。まちにはランドマークが必要ではないかと思っている。ハコモノではなく、よりソフトなランドマークがあってしかるべきだ。例えば、ブラジルの国花に「イペー」という黄色の花があるのだが、これを圏央道インターチェンジの周辺の道の駅や国道294号、あるいは公共施設等に植えて、「ブラジルの花が咲くまち、常総」というイメージづけを狙う。また、色彩の強さだけでなく、香りの強い花を植えるのはどうか。例えば、キンモクセイ。私はその香りの思い出がある。

山梨県甲府市に仕事で移り住んだとき、町中キンモクセイの香りがして驚いた。これは、まちの戦略で昔住民に苗を配ったらし

い。人間の知覚の83%は視覚情報で、聴覚情報が11%、残りを嗅覚、味覚、触覚が占めるのだが、特に嗅覚というのは特に記憶に残りやすい感覚ではないか。だから、常総にきたら、キンモクセイが香る。もしくはイペーが咲いている」というイメージ戦略を狙う。それを「花かおるまち、常総」「笑顔輝くまち、常総」というタイトルでいくのはどうか。

そして、おそらく検討中であろう圏央道ICの開発において、サンバやよさこい祭りなどのステージを設けてほしいと思う。道の駅については、国土交通省でも地域創生の核とも位置付けられ、推奨されているが、他との差別化を図るために、農産物をただ販売するだけでなく、ステージ等の舞台装置を設けて、演出等の拠点にしてもらいたいと思う。ブラジル人が多いという特徴を生かし、関東近県から人が集まるような「サンバ祭り」の開催、ブラジルコーヒーやブラジルフードを道の駅で展開できればいいのではないか。また、在日大使館と協力して、常総市とブラジル国内のどこかの市と姉妹都市提携ができればいいと思う。イペーの植樹については、沿線部の住民ボランティアと市内外国人と一緒にやって行うという形にすればより良いであろう。

私は、ランドマークとは、目に見えるものだけでなく、町のメッセージが込められていることが大事だと思う。

国が示す4つの基本目標を踏まえると、閉じた環境の中で生産性を上げるだけでなく、外部から来る人たちにお金を落としてもらうという発想も必要だと感じる。

基幹産業としては農業等が既に存在しており、それらは非常に大事なのだが、同時に外国人や2020年の東京オリンピックに向けた海外からの環境客の受け皿として、常総市が機能することも必要であろう。

以上が私の提案である。

岡田准教授 大変素晴らしいアイデアだ。常総市の戦略を「香り」に絡めるとするのは、新しい視点だ。この北島氏からの意見を踏まえて、各ミッションについてのアイデアを気楽に述べていただけると嬉しく思う。

まずは、ミッション①の「常総市における安定した雇用創出する」という点について、少なくとも4点あげていただいたように思う。

長岡委員 北島委員は、雇用創出について述べられていたが、私としては圏央道インターチェンジ周辺の開発は雇用創出の大きなインパクトだろう。常総市にある工業団地は、茨城県内で8番目の生産高・3,900億円があるのだから、インターチェンジ開発で

雇用創出が期待される。これは、ミッション1とミッション2とミッション4が関わってくる。

岡田准教授 常総インターチェンジは、成田空港に近いこともあって、かなり魅力的な場所と言えるし、魅力的な事業である。

長岡委員 結局のところ、もうからなければいくら企業を誘致したところで、企業なんて来るはずがない。これが、常総市が伸びていかない理由なのではないか。

與座委員 アグリサイエンスバレーには大賛成である。農業については門外漢ではあるが、農業の6次産業化には大いに賛成である。しかし、TPPでも話題にされたように、これが同意された後に穀物メジャーと戦えるのか、という問題が浮上する。ならば、北島委員が述べたように、農産物のプレミアム化、ブランド化を通して、貴重な農産物の生産を目指すべきである。

「Just in Time」を含めて、バリューチェーンの構築を図る必要がある。これについて、行政の支援を得ることはできないか。また、高価格で販売できるというのが一番の核となりうる。

従来型の農業とは異なるアプローチを支援するという一方で、企業家精神が旺盛な若者たちが農業に参入してくれればいいのではないか。当然、6次産業化の中には、絶対に女性の繊細さや知恵、労働力が必要になってくるが、これが女性が働きやすい環境づくりにつながるだろう。国で現在進めているプロジェクトに「農業女子プロジェクト」というものがあるが、これの常総市版をぜひ立ち上げてもらいたい。

飯田委員 常総市ならではの農産物ということであるが「小貝川」の名称について、知人から、この地はかつて養蚕をやっていた地域なのではないかといわれたことがある。私の母がつくばみらい市小絹出身なのだが、小絹ではかつて絹製品が生産されていたという。つくば市には蚕神社がある。ここは昔、シルクを生産していたインドの古い王国から流れついた姫君がやってきた場所(金色姫伝説)と言われている。そこに近いということもあり、常総市には昔、桑畑が多かったと言われている。もしそうであれば、あるいはそのような桑がまだ残っているのであれば、桑の実を活用した製品づくり、例えば桑の実ジャムなどが期待できる。また、結城市に「桑の葉茶」があったと思うが、そのように、常総市でも桑をブランド化してみたらどうかという意見が知人から

出された。茶道をたしなむ関係で、粉末状態の桑の葉茶を飲んだことがあるが、桑の葉茶単体で飲むには抵抗がありそうだが、抹茶等にしてクッキー、パン等に混ぜて使用するなどのアレンジを加えることで、常総市ブランドとしての桑の葉を売り出すことができるのではないかと。

岡田准教授 きれいな水と桑畑や各種農産物を利用して雇用を創出していくというアイデアは素晴らしいものである。

岡田委員 常総市と古河市は面積がほとんど同じである。面積が同じなのに、人口は倍以上違う。その差はなんなのかを考えると、両市では都市計画がまるで違うことに気が付いた。まず、市街化区域がかなり広い。首都圏からの近さを理由に、昭和45年段階で旧水海道市がいち早く線引きをしてしまったために、なかなか外に出られず、家を建てられなくなってしまったというのがある。都市計画整備の見直しは、そう簡単にできるものではないものの、10年以上前に調整区域の中で区域指定を行い、高齢化をなんとか食い止めようとはしたものの、当該区域の中での話だから、なかなか人口が増えない。

しかも、宅地率に関して、茨城県では65%程度なのに常総市はそれ以上であるにも関わらず、人口が増えないというのは、やはり都市計画にズレがあったのではないかと。

岡田准教授 ということは、都市計画をより柔軟にすることで新しい雇用を創出できるということか。計画に柔軟性を持たせることで、若い世代が住みやすいまちづくりを目指すということになる。

岡田委員 そのとおりである。

細野委員 雇用創出に関連して、銀行としても圏央道インターチェンジ周辺開発には非常に注目している。特に、4つの工業団地があり、加えて高速道路のインターチェンジができるということになると、雇用創出という面からして注視すべきことである。常陽銀行としても、今年の2月に、常総市と茨城県と坂東市とつくば市と連携して、東京や千葉の企業40社程度を招待して、産業立地見学会を実施した。4つの工業団地を視察しながら、インターチェンジの開発動向を見て、最後につくば市を巡った。40社の

中には、この地に非常に興味を持って頂いた企業も数多くあった。その理由として、首都圏からの近さや労働力の確保などの各種利便性を感じたからである。そのため、工業団地やインターチェンジ周辺部の開発に関して、銀行として何か手伝えることがあれば、ぜひとも支援したい。

特に、情報を提供して、業者と一緒に従業員のための住宅施設の整備などを合わせれば、雇用創出だけでなく、定住人口の増加も見込めるのではないか。

岡田准教授 雇用創出だけでなく、新しい住まいを提供するという事か。

細野委員 それから、コールセンターのような施設だと、必ずしも首都圏において置く必要はない。例えば、ジャパネットたかたのような企業はコールセンターを九州においてある。ここに300人から400人規模のオペレーターを配備している。だから、コールセンターや物流拠点のようなものを設ければ、数百人単位のオペレーターとしての雇用創出やチャンスが生まれる。あくまで、工場の誘致イコール人材の確保、としてではなく、違った視点からの人を集める施策があるのではないか。

岡田准教授 まだまだ意見はあると思うが、時間が限られているので、今日は先に進ませていただく。意見については会議終了後、随時受け付けている。常総市インターチェンジ周辺部の開発という話が出てきたが、常総市への新しい人の流れを作るという意味でも、インターチェンジは魅力的な財産ともいえる。これを踏まえて、ミッション2「常総市への新しいひとの流れをつくる」についてのブレインストーミングを行いたい。何があると、常総市に新しい人の流れができるのかについてご意見をいただきたい。

飯田委員 常総市には、神社仏閣等文化施設が多いことを踏まえて、市の観光化を推進していくべきである。場所は素晴らしいが、その魅力を伝えるための人材育成が必要だと感じている。そのために、より一般の方々を巻き込む。自分の近所の観光名所については説明できるが、遠方ともなると場所を含め、その説明ができない。そこで、家にいることが多い高齢者、可能ならば全市民を対象に、目的地への行き方がわからない市外遠方からの来訪者に対して、説明ができるように、市民全員が参加できる観光案内アドバイザーを設けることを提案したい。

- 岡田准教授 市民中心で「訪れたくなるまち」を創るということか。
- 飯田委員 誰かを任命するのではなく、市民全員参加ということにして、その流れで、特に自分の街を紹介したい人を対象にして、観光案内人的な役職を任命し、この人に名刺を預ける。その名刺を、市内各所に持っていけば何らかのサービス、特典が得られるという形にすれば、行政が動かなくても、市民による観光推進がなされるのではないか。
- 北村委員 新しい人の流れということになると、やはり観光がメインになる。水海道地区の「あすなろの里」にて、古代エジプト・クレオパトラ朝期)のエンドウ豆を栽培していたことがあり、それをPRしたところ、大多数の人々が訪れたことがあった。また、今年であれば、ひたちなか海浜公園にて春夏秋冬の花が植えられており、花が咲く時期になると、はとバスでかなり大勢の人々が訪れるという。特に5月の連休時は、去年と比較して一番多かったという。そこで、あすなろの里や市内の各公園においても、四季折々の花を植えるのはどうか。常総市の桜は有名であり、これを見るために常総市に来る人もいる。春は桜、夏はどうするかという感じで、1年を通して、人がやってくるようなまちづくりは面白いかもしれない。
- 秋場委員 観光は大事なことである。でも、その前に町中を何とかしないといけない。夕方19時を過ぎると、人も車もいなくて、とても寂しい。「市民の広場」があるが、トイレも水道もないというのでは、市民は集まらない。だから、そのような場所をもう一度見直して、人が集まるようなまちづくりを再考すべきである。具体的には、非常に閑散としているカスミ跡地と市民の広場を合わせることができれば、まちなかの活性化も期待でき、水海道のまちなかを宣伝できるのではないか。
- 岡田准教授 カスミ跡地の活用については私も気になっていた。前を通る度に気にしていたところである。
- 細野委員 常総市は、町そのものは古い町であるが、そこかしこに趣のある建物や古民家が点在している。これらをうまく活用できないものか。かつて赴任した潮来市の隣の佐原では、「蔵のまち」ということもあって、蔵に代表される古民家が立ち並び、それを

利用したカフェや用水路を活用しており、週末になるとたくさんの人々が訪れている。そこで、カスミ跡地をキーステーション的な施設を作り、ここから徒歩で町中を散策しながら、カフェがあったり、旧報徳銀行の建物を資料館にして改装して使うなど、歩き回って常総市の良さを再発見してもらおう仕組みづくりができないものか。

施設をそのまま使うのは難しいのかもしれないが、利根町では空き施設に日本スポーツウェルネス大学を誘致した。ここでは、空き小学校校舎を利用しているが、大学の誘致により学生の住居や飲食店の増加などの相乗効果をもたらした。常総市の空き施設がどのくらいあるのかは不明だが、これらを全く異なる分野の企業等に利用させることで、全く違った人の流れが生まれるのではないか。定住人口の増加は難しいので、観光に代表される交流人口の増加を目指すというイメージをもって、こちらにシフトしていくというのも必要ではないか。

堀越委員

2020年の東京オリンピックに向けて、茨城県としても、雇用促進だけでなく、経済効果も大きいということで、「おもてなし県」を目指して取り組んでいる。市外からやってきたものとしても、この市には歴史的に古いモノや価値あるものがたくさんある。しかし、それらをただ「見る」だけでは、京都のようなよりすごい観光地と比較されてしまうので、「体験」などのイベント的なものをつけることで、そこに来たことで得られる体験を与えることが必要である。東京で消費生活的な暮らしをしている人たちが、自然の中で過ごしつつ、心静かに寺院で講話を聴講したり、写経をしたり、古民家で古き良き庭園を鑑賞しつつ茶をいただいたりする、着物の着付けなどの体験をセットにすることで、観光客を呼び込めるかもしれない。それに伴って雇用も創出されるかもしれない。

五木田委員

5月の連休頃から、真夏の暑い時期は除いて、天気の良い日には多くのバックパッカー達が町中を散策している。5～6年くらい前から、そのような方々が目立つようになってきた。そのような方々から、よく「どこか食べる所、休憩所はないか」と聞かれるのだが、教えられる場所がなかなかない。そこで、宝町の空き店舗であるカスミ跡地等を有効活用すれば、このようなバックパッカーも再訪してくれるだろう。よほど特別な事情がない限り、おそらく多くのバックパッカーは2度目は来ないだろうが、それも踏まえてまちづくりは進めるべきで、どこか休憩所的な場所が必要ではないかとも思う。

- 岡田准教授 「憩いのスペース」のような、ちょっと一息つけるような場所が必要だろう。そこにイペーが咲いているような感じが想像される。
- 五木田委員 ちなみに、イペーは、横浜の大栈橋のクジラの背中に使われるほど、建築資材とかなり丈夫である。
- 岡田准教授 それは知らなかった。大変貴重な助言である。憩いの場所で若い世代が休んだり、子供を預けたりできるようになるなど、女性が住みやすいまちづくりを目指すことも重要なことだ。
次に、ミッション3「常総市で若い世代が結婚・出産・子育てする希望をかなえる」についての意見を求めたい。
- 福田委員 先日の、女性議員との会談の場が出た意見であるが、常総市には産科がないということである。まず、産科が市内にないのだから、常総市で「結婚・出産・子育て」ができない。だから、若い人が安心して結婚・出産・子育てができるような施設を行政も力を入れて誘致してもらうことが必要である。
- 岡田准教授 私たちもそれについて調査を行っていた。つくば市にも産科がなく、今待機している段階にある。そこで、隣の常総市に魅力的な産科があればつくば市から出産希望者がやってくるのではないかと。
- 中川委員 かつて、常総市内には産科が10軒以上あった。ところが、一昨年全てなくなった。このことは、少子化対策として、地域として何とかしなければならない課題だ。対応は、少しずつであるがきぬ医師会としても動いている。年齢に伴ってやめた元産科医の中に、そのご子息も産科をやっている方が何人かいるので、そのような人たちに地元に戻ってきてもらえるようこれから働きかける予定である。
- 北村委員 出産には費用がかさむ。20年前に比べて倍近くかかる。話によると60万円近くかかるらしい。40万円程度は保険などが下りたが、残りは実費。出産にかかる費用や夫婦共働きともなると、生まれた子供を見てもらえるところがないと、若い世代と

しても出産を考えてしまう。子育てにもお金がかかる。出産でさえも、お金がかかるともなるとどうしても子供を産むことを考えざるを得ない。お金がかかることはなかなか難しい。だから、出産にお金がかからないようにしてあげることが必要である。

また、常総市の待機児童数はそれほど多くはないと聞いたが、親が病気になった時に保育所で子供を見てもらえないという。

他市町村では、その場合に子供を受け入れる施設があるらしいが、常総市にはそれがない。だから、病気になったときでも子供を受け入れてくれる施設があれば、子供を育ててもいいかなという夫婦が増えるのかも知れない。

福田委員

常総市には、認定こども園ができ、幼稚園と保育園の両方の仕事を兼ねている場所がある。空きは十分あり、子供達を受け入れる体制はできている。しかし、市内に産科がないということを開き、それはまずいことのように思う。とはいえ、それに向けての対策を打ち出しているということですので、なんとか頑張っていたきたいと思う。

ところで、圏央道インターチェンジの開通に伴い、車で東京に行きやすくなる。またTXを使っても東京に行けるという立地条件を生かし、東京ではありえない低価格で土地を提供する。そして何らかの条件付加で家を建ててもらおう。これは、東京の若い世代の方々をできるだけ呼び込む施策である。東京では、子供を預ける場所がなくて、まさに待っている状態にあるということだから、そのようなことはここ常総市には全くないことを宣伝し、土地の安さと自然の豊かさ、豊富な味覚、通期圏内であることを中心に据えたPRにより、東京の若者世代を呼び込むプロジェクトを企画し、実行する。土地のイメージが思い浮かばない人には、ツアーを組んでこの市に来てもらう。若い世代は、子育てに伴い、かなり出費する。食事、洋服、カバン、自転車等。相乗効果が大いに期待される。人口が少なくなりつつあるのだから、どんどん来てもらえればいい。

小竹委員

魅力のある学校づくりが重要である。ある地域では、小中学校が自由化しているために、少子化のためにどの小学校でも特色を出すために躍起になっている。例えば、放課後授業や課外授業に力を入れている。そのような動きが常総市では全く見られないので、それに力を入れてほしい。具体的には、放課後の英会話教室、手芸、手品、ハンドベル、グランドゴルフ、囲碁等、いろいろやってもらえるのであれば、それだけでも引っ越ししてこようというインセンティブになる。特色ある学校があれば、その学校に入学させたいということでその市に引っ越ししてくる。仕事だと、単身赴任とかになってしまうが、子供のことになると家族総出で引っ越ししてくることが多い。

岡田准教授 この話は、既に市の職員からも電子会議室の中で意見が出ている。例えば、筑波大学生に宿題を教えてもらう。筑波大学生による英語講座などのアイデアがある。

秋場委員 常総市には、放課後ふれあいスクールがある。地域の人たちが、放課後、地元の学校に行って、子供たちと遊ぶなど、いろいろなことをしているのだが、これをもっと宣伝すれば良い。もしかしたら、これを知らない人が多いのかもしれない。

五木田委員 子育て世代にとって小学校はインセンティブがある。つくばみらい市に陽光台小ができたが、ここに入学させるために、今つくばみらい市が非常に人気上昇している。つくば市には春日学園ができたことで、春日地区が非常に人気が出た。これらを踏まえると、どの程度の「良い学校」があるかが、特に若い世代にとって地域を選ぶ際の一つの大きな判断材料になるといえる。また、筑波大学教育学部の学生や大学院生に夏休みや空き時間に勉強を見てもらうことは、子供からすれば勉強する機会を、学生からすれば子供と接する機会が実地として与えられるということで、その後の教育現場での行動に生かせる経験となり得る。だから、筑波大学と教育面でタイアップする方策が考えられる。

飯田委員 学校や保育所では、そのような環境が整っているが、絵本の読み聞かせボランティアや親子コンサートが開催されているときに、小さな子供がいる母親は参加できない。外から来たために、親類縁者のいない核家族の母親には、子供を預かってくれる場所がないので、連れていくか参加をあきらめざるをえない。連れていったとしても、参加を断られてしまう場所がほとんど。つくば市や守谷市、または都会であれば、そのような状況に対応する場所が整備されている。商業施設等に、買い物の間子供を見ているという施設が用意されている場合がある。しかし、学校教育から離れたところにはそのような場所がまったくない。身近に親戚縁者・自分の親等がいれば、そのような方々に預けることが可能ではあるが、核家族の母親にとってはその点がネックになっている。場合によっては、あまりに不便なので東京に出ていってしまうこともありうる。

岡田准教授 小さい子供を安心して気楽に預けられる場があり、そこから働きに行ったり、遊びに行ったりできるということになる。

岡田委員 そこで、高齢者の出番であるといえる。生涯現役でまだ社会復帰できるという方であれば、その力は役に立つと思う。農業体験等、自身のノウハウを伝えていける仕組みづくりができれば良い。

細野委員 (資料配布により、常陽銀行による、子育て世帯向け住宅ローン、定住者向け住宅ローンの紹介)
市町村や外部から来る方に応じてさまざまな制度がある。残念ながらまだ常総市にはない。今後、制度を作る機会があればぜひとも協力させていただきたい。

岡田准教授 これまで、ミッション1・2・3との関連で出てきた話題でもあるが、最後にミッション4「これからの時代にあった常総市をつくり、安心な暮らしを守るとともに常総市と他の地域を連携する」についてご意見を伺いたい。周辺地域と連携して、どのように常総市らしさを出していくか、皆様のご意見をいただきたい。

與座委員 ミッション4に限らず、全ミッションに関わることだが、日本版CCRC構想について提案したい。おそらく、常総市も手を挙げていたと思うが、これに関して非常に潜在的なマーケットが存在すると思う。地方創生の中に、CCRCを核に据えてやっていくことが掲げられていた。

それから、あすなろの里等を含めて、グリーンツリーズムを推進し、日帰りだけでなく、宿泊も。そして、将来的には常総市に住むような人を作っていくことが大事である。また、合併したことで非常に増えた体育施設について、ミズノが指定管理者になったことを踏まえ、スポーツツリーズムの観点から何かできないか。例えば、つくば市では大きな大会の開催を主眼においているが、常総市では施設がたくさんあることを踏まえて、合宿を誘致したらどうか。そうすれば、さまざまな小中学校やトップアスリートのチームたちが常総市にやってきて、この市で練習試合ができるということで町中に継続的に金が流れることになるので、スポーツツリーズムもありうる。雇用も生まれると思う。

堀越委員 台湾でサイクリングが盛んということだから、台湾の企業・メーカーに声をかけて、つくば市でサイクリング大会が開催され

ていることを踏まえて、そのような大会を誘致するというもの選択肢としてありうる。施設だけでなく、常総市の風景、環境の中で素晴らしい自然を体験していただくというもの素晴らしい魅力の一つだと思う。

それから、安心な暮らしと常総市と他の市との連携ということで、東京からの近さという有利な立地条件を生かし、東京都民をマーケットにしたアイデアを出していくことが大事ではないか。首都圏における直下型地震が学者等により危惧されている中、非常用備蓄米を保存しておき、東京都に対して、どの程度までなら受け入れ可能かを示すことで震災時の対応について提携を結んでおき、普段から相互に交流があるイベントを行い、地震時の対応や野菜づくり等を通して、人の流れが生まれ、金が流れるのではないか。

本橋委員 常総市が魅力ある町であることを伝えるために、マラソン大会のようなイベントを開くことを提案したい。守谷市、つくば市、坂東市でマラソン大会を開催し、一度に何千人もの人を呼ぶことで、都市の魅力を伝えることができていることを踏まえての提案である。常総市ではかつてはやっていたが、今はやっていない。

岡田准教授 今年常総市で駅伝大会をやるらしい。

飯田委員 常総市内の一部では防災無線が不具合で、いまだに音が聞きづらいなどの苦情があるという。常総市に住んだら安全であることをアピールするためには、防災関係により力を注ぐ必要がある。神経質な母親ともなると、自分が住む地域の危険性を考える。岩盤はどうか、地域で防災マップを作成しているのか、小中学校で継続的な防災教育がなされているのかなどについてである。

天災だけでなく、震災時の工場における災害対策など、防災意識の向上や防災マップの作成、市民間の防災意識の向上が必要だと思う。

岡田准教授 米があるという利点をいかし、何かあったら常総市に逃げるといった選択肢としてあり得るのかもしれない。

北島委員 豊島区は秩父市と姉妹都市になっている。豊島区は、将来、区内の介護施設等が満員になってしまうことを見越して、一部を

秩父市に依頼するという方策を行っている。これは、地方創生会議の提言を受けた行動である。足立区や葛飾区と常総市が姉妹都市提携を結び、あすなろの里のような宿泊施設で若者を受け入れてサマースクールのようなものをやったり、防災時には避難場所にしたり、将来的に、そこを高齢者施設や介護施設として常総市が経営に携わるなど、常総市だけではできなくとも、首都圏の都市との連携できそうなこと、あるいは災害時の避難対策や将来の高齢施設や介護施設の受け皿となるような模索をありうるのではないか。

草間委員

今までさまざまな意見が出てきているが、根本的な問題として、常総市で生まれた人が定住してくれるような常総市にしていけないといけないと私は思っている。つくばみらい市やつくば市に人口が集まる一方で、そこで生まれた人が生まれた所を離れていってしまうという現実がある。これから常総市を盛り立てていく若い人が市外に出て行ってしまうというのに、なぜこのような人々を呼び込もうとしないのか。常総市をこれからどのように盛り上げていくのかという話題なのだから、人を市外から呼び込むのではなく、常総市で生まれた人を定住させるためにはどうしたらよいかを考えなければならない。つくば市のように、人口が集中する一方で、周辺部からは人がどんどん少なくなっている。だから、一番肝心なのはこの常総市で生まれた子供たちがいかにして定住させる方法を考えなければならない。子供が2人いれば、1人は家を継ぎ、もう1人は常総市に住むだけの価値のある常総市にしていかなければならない。

他から人を呼び集めるというのではどうにもならない。いくら宣伝して人を呼び集めても、根本的な問題解決にならない。人を呼び集めたところで、その人たちが金をこの市に落としていけないのであれば、何の意味も持たない。これからの常総市を考えていく際には、いかに常総市で生まれの人がここに定住するのかを考える必要がある。

次に「地方創生」についてだが、かつての市長の肝入りで工業団地を作り、工場を誘致したものの、それで終わっている。どうして、立地条件も素晴らしいこの常総市の工業が伸び悩んでいるのか、下妻市では、インターチェンジがないにも関わらず、売れる土地がないほど工業団地の土地が売れまくっているというのに。圏央道インターチェンジができるわ、谷和原インターチェンジはあるわ、TXは割りと近いという好立地条件であるにも関わらず、どうして伸び悩む工業の心配をしなくてはいけないのか。圏央道インターチェンジ建設に向けて、農林水産省の建設許可が下りたというのはすごいことである。農林水産省でも、圏央道が通り、TX、谷和原インターチェンジが近いという立地条件の良さを認めているからだ。普通ではありえないことである。

この立地条件を生かして、今後の常総市を考えていく必要がある。

とはいえ、常総市の未来は明るいはずだ。だからこそ、ぜひとも、筑波大学の先生にお願いして、この将来の常総市の発展のためにご指導をよろしくお願ひしたい。

岡田准教授 本日は、貴重な意見を聞くことができ、非常に刺激的で勉強になった。今後も、このような形で、常総市で生まれた人たちが戻ってきてくれる、あるいは定住してくれるような常総市の魅力をどのように提示していくのかを考えていきたい。

今回、この場で言い尽くせなかったこと、あるいはしばらくして思いつくこと、いろいろあると思うが、今後も、この4つのミッションについて常総市らしい取り組みや戦略について、思いつきましたら、メールでも電話でも、手紙でも個別面談でも、または直接、私が伺うというのでも良いので、ぜひともお伝え頂けるとありがたい。

とはいえ、スケジュールの関係上、7月29日までにいただけるとありがたい。いただいた意見については次回のプロジェクトチームという形で、庁内の若手中堅職員と若手の市民代表の方々による議論の材料とさせていただきたい。

今後の予定については、事務局よりメールもしくは手紙という形を取らせていただく。8月11日の次回の戦略会議までに、データ分析や人口ビジョン等の作成を行い、常総市の戦略の全体像をお示しし、そしてご助言をいただくという形になると思われる。今後ぜひともみなさんのご協力を頂けるとありがたい。

また、本日お配りした補足資料に、市役所の職員による電子会議室での発言をまとめたものがある。職員の実名が掲載されており、個人情報になる。こちらは、他人に見せたり、コピーしたりせず、厳重に保管していただきたい。

以上で、私からのご説明を終わりにさせていただく。

会 長 岡田准教授、長時間にわたりありがとうございました。本日、委員の皆様からいただいた貴重なご意見は、戦略策定に生かしていきたいと思う。他になければ、協議を終了し、進行を事務局にお返しする。

事務局 次回の戦略会議は、8月11日の午後1時30分から予定している。戦略策定の都合上、タイトなスケジュールになっており、お盆前に開催したいと考えている。後ほど、正式に連絡させていただく。何か質問はあるか。

生井委員 この会議は全部で何回開催するのか。

事務局 あと4回予定している。

飯田委員 転入転出者アンケートを市で実施しているとお聞きしたが、その中身を見せてももらうことはできるのか。

事務局 現在集計中である。集計が終わったらお示ししたい。

飯田委員 当事者の生の声なので、ぜひともお見せいただきたい。

事務局 他にないようであれば、以上で第2回常総市まち・ひと・しごと創生総合戦略会議を終了する。

(午後3時45分 会議終了)

上記の議事の正確なることを証するためここに署名する。

平成27年 8 月 7 日

常総市まち・ひと・しごと創生総合戦略会議

会 長 塩 畑 実

署名人 喜 見 山 明

署名人 塚 越 輝 子

